



基礎のある研究へ

常任参与 大 槻 進

単なる思いつき程度の創意だけで過ごすことのできたイミテーション時代は過去のものとなった。新しい原理の着想による創造の時代に入った現在は、研究に対し創造性あるいは独創性の要求されるきびしい時代に大きく変化している。考えようによってはこれこそ研究の本来の姿であって、喜ばしい時代になったともいえる。

暗中模索の中からはっと新しい考えを思いつくとか、瞬間的に暗中模索を可能にするのは、大量の基礎的な知識のバックグラウンドがあればこそである。そして持てる知識を直観とかひらめきを通して創造に結びつける知恵をもたなければならぬ。たしかに難しいことであるが、自らの努力で新しい考え方の芽を育て、進むべき方向を定める以外にはない。古来より独創的な発明や発見は基礎研究において、深く真理を探究する場において、多くなされていることを思えば、まずこの基礎研究の充実こそ先決すべき問題であると考えざるを得ない。

オイルショックを境にして化学工業は停滞しているが、これは表面的なことであり、実際は将来性のある芽が徐々にではあるが生長しつつあるように思われる。基礎学問の着実な進歩につれて、新しい時代はあるいは早い速度で幕を開けるようになるかも知れない。

新時代に適応する基礎のある研究へ大いなる好奇心ときびしさをもって入っていかなければならない。